

30. 当科における Atheroembolic renal disease (AERD) 10 例の検討

獨協医科大学越谷病院腎臓内科
北澤篤志, 竹田徹朗

【はじめに】AERD とは腎臓における Cholesterol crystal embolism (CCE) である。1862 年、ドイツの病理学者 Panum らが cholesterol crystal (CC) が様々な小動脈を閉塞して組織障害を起こすことを初めて報告した。1945 年 Flory らは CC の起源は大動脈など主要動脈の粥状硬化病変 (plaque) であることを証明した。

【対象と方法】2011 年から 2015 年の 5 年間に当科を受診した AERD 10 症例についてその腎予後について後方視的に検討した。

【結果】男性 9 例, 女性 1 例で平均年齢は 70.3 ± 5.6 歳であった。発症までの期間は 2 週から 20 週であった。Blue-toe syndrome を認めたものが 9 例でその全症例で皮膚生検を施行し cholesterol cleft (CC) を確認できたものは 4 例であった。好酸球増多症を認めたものは 9 例であった。既往歴では糖尿病が 6 例, 慢性腎臓病が 8 例であった。またステロイド加療を施行したものは 4 例であった (ステロイド施行したものを A 群, 施行しなかったものを B 群とする)。A 群では全症例でステロイド開始後有意に Cr は低下したが, うち 1 例は経過中に胸部大動脈解離を発症し透析導入となっている。B 群では溢水や新規に急性心筋梗塞を発症するなど 3 例は緊急透析導入となった。他 2 例は Cr < 2 mg/dl で緩徐な経過を辿っている。残り 1 例はすでに腎萎縮あり, また皮膚生検でも CC は確認できなかった。

【考察】AERD の多くは抗血小板剤, 抗凝固剤を内服しているため腎生検は困難である。診断には Blue-toe や好酸球増多が手がかりとなる。皮膚生検で CC を認めた症例は 44% で文献報告でも 5 割程度とされ, 臨床診断が重要と言える。血管内操作術後急激に進行する症例もあり, 術後は eGFR, 好酸球数, 足趾の皮膚所見についてこまめな観察が重要と考えられた。

31. 獨協医大皮膚科における 頭部血管肉腫の臨床的検討

皮膚科学

藤平尚弘, 塚田鏡寿, 西川聡一, 嶋岡弥生,
林 周次郎, 鈴木利宏, 濱崎洋一郎, 籠持 淳

【目的】極めて悪性度の高い皮膚軟部悪性腫瘍である頭部血管肉腫について, 当科の症例をまとめ, 今後の診察・治療に生かす。

【方法】2006 年 1 月から 2015 年 12 月までの 10 年間に, 当科にて頭部血管肉腫の病理学的診断を受けた 12 症例に対し, 頭部血管肉腫診療ガイドライン (2015 年 10 月策定) を踏まえ, 症例の比較・検討を行った。

【結果】初診時年齢は 64 歳から 89 歳で, 平均すると 75.2 歳であった。

皮疹出現後は急速に病変の増大が生じるケースが多く, 他の皮膚悪性腫瘍と比較し早期受診例が多い。当科では明らかな誘因 (外傷・手術歴など) のある症例は認めなかった。

臨床所見は, 最大径 5 cm 以上あるいは多発性病変である症例が大部分を占めた。腫瘤や潰瘍を形成し易出血性であることが多い。初診時では, 遠隔転移のほうが所属リンパ節転移よりも多く, 転移様式として血行性転移の関連が考えられた。TMN 分類・病期分類は I 期から IV 期までまんべんなく分布していた。IL-2 製剤は, 術前・術後の病変制御目的として使用する。腫瘤でない紫斑性病変に対し病変の縮小・消退がみられるケースが多かった。一方で, 間質性肺炎等の重篤な合併症を併発した症例もみられた。

近年は, 術後の放射線治療と化学療法の併用を第一選択として施行している。放射線療法は, 原発巣に対して総線量 70Gy 前後を目標に施行する。治療を完遂した症例も多いが, 重篤な放射線皮膚炎等で中止となったケースも見られた。化学療法は, 近年, PTX が血管肉腫に対して保険適応となり, それを中心に使用している。

生命予後は, 1 年生存が 12 例中 9 例 (75%), 3 年生存が 10 例中 1 例 (10%) であった。(※ 転帰不明となった 2 症例を除外)

【考察および結論】生命予後は極めて悪く, 3 年以上の生存期間を得られているのは現時点で 1 例のみであった。近年の症例数の増加が顕著で現在治療中の症例が多く, 予後の改善がある程度は見られている。今後も症例を蓄積し検討することで, 更なる予後の改善を期待している。